

<p style="text-align: center;">図画工作 4年A組</p>	<p style="text-align: center;">〇〇のすみか ～どんな巣?こんな巣!～</p>	<p style="text-align: center;">図画工作科 専科 西井 恵美子</p>
--	--	--

## 1. 題材設定の理由

### (1) 本実践の主張点

#### ①自然素材を使う意味

自然素材を使う造形活動のよさのひとつは、普段何気なく目にしているものに新しい見方や感じ方、表し方をみつけることができるということである。自然素材には、見立てができる幅の広さがある。そこには、自由な発想や新しい表現が生まれる可能性が多く含まれている。また、必要な素材を探そうとすることも造形活動を成り立たせる上で大切なこととなる。そこから自然とのかかわりや、自然への気づきも生まれてくるだろう。また、街中にありながら自然環境に恵まれ、緑の多い本校のよさと特徴を活かし、校内の素材を活かしながら活動することで、題材への関心や期待も高まるだろう。ここには相乗の効果が期待できると考えた。

#### ②造形行為における意味

今回授業をする中学年の子どもたちの造形活動の特性は、「組み合わせる」「切ってつなぐ」「かたちを変えてつくる」こと、そしてそこから新しい形をつくるとともに、その形から発想してつくりだす活動へとひろがっていくものである。これらの造形行為は、一人一人の思いとつながりをもって行われるものであり、想像力を働かせ思いをふくらませる際に、それまでに得た知識や関心、技能などを組み合わせ、他のことがらとつないで合成し、新たなイメージをつくったり思いをふくらませたりする働きとしての意味も含まれている。このような活動においては、どのような材料と材料が合うかを試したり、表したい感じになるまでかたちを組み合わせたり、偶然の感じの面白さに気づき、それを選ぶことを含め、自分らしい美しさや面白さなどの感覚を働かせるようにすることといった、鑑賞の能力も働くこととなる。これは“感じる”“表す”学びの連鎖にもつながると言える。

#### ③造形あそびにおけるテーマ性

自然素材をつかって、なにかに見立てる活動はとても多い。確かにそれは、自然な気づきであり、自然な表現である。しかし、単に自然素材を使って遊ぶだけでは、低学年の素材経験の段階ともとれるし、今年度教科提案でも述べた図工科としての子どもを育てる期待するには不十分である。そこで今回は、造形あそびとしての学習の中にテーマ性をもたせることにとした。それが、「巣」である。巣は、一般的には「動物が捕食・休息・繁殖のために作る構造物」と定義されている。巣…それは、動物たちにとって暮らしやすい場所、居心地がよくて落ち着ける場所であり、他のものの侵入を防ぐものでもある。そして、そこに暮らす生き物は、どこに出かけてもそこに戻ってくるし、安心して食べたり、子どもを産んだり、育てたりする場所である。そんな「巣」への思いをめぐらせながら、子どもたちが表そうとする表現や活動には、巣の機能性やその巣で暮らす生き物へのイメージ、材料との対話からおこる表現の工夫、まわりの環境との共生が組み込まれてくるのではないだろうか。それぞれの「巣」をデザインするという意識を大切にして、自然環境の中での造形行為を楽しんでほしい。そして、自分たちのつくりだした巣が自然の中にとけこみ、一体となって存在するという美しさが感じられれば、なお素晴らしい。

### (2) 教科提案とのかかわり

#### 『“感じる”“表す”学びの連鎖 ～自分らしい表現を求めて～』

自分の思いを素直に表現する図画工作科の造形活動は、主体性なくしては存在しない。子どもたちは、表現活動の過程で様々な思考し、自分らしい表し方を求めていく。それは、題材と出合い、試行錯誤を繰り返しながら表現の内容や方法を生み出していくすべての過程の中で意識されるものであり、子どもたちは幾度もやりなおしながら自分の思いを表そうとする。そこには、子ども一人一人が、“感じる”ことを大切にし、“感じた”ものを“表そう”とし、また、“表した”ものから“感じ”，そこから思いうかんだものをつけたしたり、つくりかえたりしてまた“表し”…という学びの連鎖がある。その中で行うすべてが自分の選択であり、決定である。だからこそ自分の思いにあった表現、自分らしい表し方ができたときの喜びは大きいのである。このような“感じる”“表す”学びの連鎖が、子どもの学びの姿に表れるような実践を行っていった

めには、造形感覚を十分働かせることができる授業展開や場の設定が重要であると考えている。一人一人の表現過程を考慮し、試行錯誤を繰り返す時間や場を十分保障することによって、造形活動における成就感や満足感を味わい、次の活動に対する見通しや意欲をもつことができると考えるからである。そして、子どもの意識の流れを大切に学習展開、なかでも、題材との出会いである導入は一層重要であるといえるだろう。私は、導入とは右記のような意味をもつべきであると考えている。このように、一人一人が「よっしゃ!」「それなら!」という思いをもって表現や活動にとりかかれるような導入をしたい。また、自分の取り組みに対する振り返りの場、互いの思いや願い、工夫や表現を伝え合う交流の場の設定などもしていきたい。

**導入（題材との出会い）の意味**

- ①題材の中に含まれている方向性（対象へのかかり方・学びの多様性）を知ること
- ②確信をもって次に進める道筋が見えてくること
- ③題材の目標をつかむこと

## 2. 題材目標

- 身のまわりにある自然材料に興味を持ち、親しみ、表現や活動を楽しむ。
- イメージをひろげながら、自分が表したい巣を思い浮かべる。
- つくりたい表現にあわせて、くくったりつないだりあんだりしてつくり方を工夫する。
- 友達や自分の表現や活動のよさをみつけたり、感じ取ったりする。

## 3. 題材計画（全5時間）

**○○のすみか ～どんな巣?こんな巣!～**

**1.2 / 5 時**

みる・さがす  
集める・見つける  
かんじる  
くらべる  
みだてる  
おもいうかべる  
くみあわせる  
切る・折る  
つなぐ

つき山におちているお宝材料をさがせ!  
集めたものでなにができるかな?

どこにあるか知ってるよ      たくさんあるのはあそこだよ

いっぱいあるな!      いろんなのがあるな      こっちの方がたくさんあるよ

細いのと太いの見つけた!      まっすぐのと、まがったのもある

○○にみたいになったよ      この枝の形を活かして…

□□あそびができるよ      小枝と葉っぱの組み合わせで…

ポキポキ折るのも楽しいよ      どんどん長くつなげて道に!

学習活動

予想される  
子どもの動き

場所

☆支援  
★評価

築山・修景緑地など

☆身近な自然から材料をみつけたり、集めたりすることを楽しんでほしい。そこから生まれる自然な見立てを大切に、「組み合わせる」「切ってつなぐ」等の造形行為から生まれること・ものを楽しむ。

**3.4 / 5 時  
(本時)**

であう・ためす  
切る・折る  
つむ・つなぐ  
おもいうかべる  
えらぶ・かえる  
ふくらませる  
組み合わせる  
感じる  
取り入れる  
ひろげる・ふかめる  
みる・みなおす  
あたためる  
あしわう

ためしてみよう      どんな巣にしようかな  
つくってみよう      どんな生き物の巣かな

枝をつんでいこう      この木を使いけいな      あったかい巣だよ

小さく折ると…      この2つつなげたら?      たくさん住める巣だよ

う～ん、ちがうなあ…      卵を育てている鳥の巣だよ      伝える

あのこの巣、面白いな      秘密の生きものが住んでるよ

どう?どんなふうに見える?      引越ししやすい巣にしよう!

つくり・つくりかえ・つくりつづける

ああでもない・こうでもない      ここに置くといい感じ!

あそこにおいてみたら?      ほんとに住めるかな?

修景緑地

☆子どもたちのつぐやきや表情、動きを観察したり記録したりしてみたい。

☆子どもたちの様子を見て、必要に応じて言葉かけや具体的な技能面での指導をする。

★自分の表したい巣を思い浮かべようとしているか  
★材料から思いつき、すすんで試したり、表したりしているか

**5 / 5 時**

みる・みつける  
感じる  
伝える

すみか探検! どんな巣?こんな巣!

みつけた!      すごい!      ほんものみたい!

どこ?      そのままおいておいたら何か住むかも!

修景緑地

★表したい巣をつくることを通して楽しい造形活動ができたか  
★友達や自分の表現や活動のよさをみつけたり感じたりしているか

## 4. 題材の考察

### (1) 主張点とかかわって

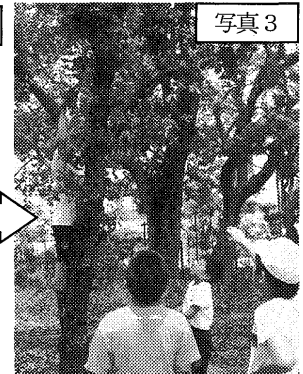
必要な素材を探そうとする中で自然とのかかわりや、自然への気づきが子どもたちに生まれてきた。自然環境に恵まれ、緑の多い学校のよさを感じ、素材を探し、見つけ、集めることで、題材への関心・期待も高まっていったといえる。

本題材で抽出した造形行為である「組み合わせる」「切ってつなぐ」「かたちを変えてつくる」について、造形行為のポイントを表し提示するとともに必要な材料や用具と一緒に置いたコーナーをつくっておいた。導入時にこれらには簡単に触れたが、強制するものではない。表現や活動をすすめる上で、「知りたい」と思った時に、自分から求め確かめることができるようにする支援である。自分自身で解決できるものの幅をひろげたり、また、同じ求めでそばに寄った子ども同士のかかわりあい自然に生まれたりすることを期待した手だてであった。もちろん個々がここで解決できない時は、指導者が個別に指導や支援をした。

このコーナーを設けることにより、手順のポイントを参考にしながら材料同士のくっつけ方を試したり、用具を使って思うように結んだりつないだりして、必要な時に自分からこのコーナーを訪れる子、コーナーに来て偶然に同じ表現をしようとしていることがわかり互いに教えあう子たち、表現方法に困っている子や活動が滞っている子に「あそこにいけば〇〇あるよ」と声をかけて友達に働きかける子といった姿が子どもたちの中から引き出された。(写真1)そして、表したい感じや形になるまでくっつけたりつないだりくくったりを繰り返しながら、自分らしい感覚を働かせ表現をしていった。そこには表してはまた感じ、感じたものからまた表し…という、“感じる”“表す”学びの連鎖が表れていたと言える。



また、「巣」への思いをめぐらせながら、子どもたちが表そうとする表現や活動に材料との対話からおこる表現の工夫、まわりの環境との共生が組み込まれてきた場面があった。右の写真2の子どもはつくりだした巣を自然な場所においてみたいという思いを持った。そこで、木に登り始め、どのような置き方にしようかと一人迷っていた。その様子に何人かの友達が気づき、「もうちょっと上の方がいいよ。」



「木の股のところに置いたら落ちにくいんじゃない?」「少し右!」などと、下から声をかけた。(写真3)一人で迷っていたA児であったが、木に登って見ている視点と下からの視点を持ってアドバイスをくれる友達の意見に支えられ、自信をもって納得した場所に巣を置くことができた。このように、友達との自然なかかわりは「響き合い」ともいえるが、自然の中で「巣」をデザインするという意識を大切にしたい造形行為を楽しみ、つくりだした巣が自然の中にとけこみ、一体となって存在するおもしろさを感じた場面であったと考えている。

### (2) 互いのまなざしが響き合う姿は

図工科における“互いのまなざしの響き合い”とは、いくつかの段階や流れがあると考えている。子どもたち同士の響き合いにつながるためには、題材や素材との響き合いが必要不可欠である。したがって、ひとつの題材のもとにそのテーマ性や内容、表現方法に向かっているということが響き合いのはじまりの段階となる。題材のもとにそのテーマ性や内容、表現方法を全員が受けとめ、理解した上でなければ、響き合いの土台はない。だから私はそれを知る、受け止める段階である「導入」をととても大切にしている。(1. (2)で述べた)しかし導入後の表現や活動は個々に分かれてのものになる。全員が同じ一点にまなざしを向け、全員で「響き合う」ことは作られた場面での条件つきのものになってしまう。もちろんそのような場面も意図して作ることもある。全員での中間鑑賞や終末鑑賞などはその例であるが、そのように呼びかけ、全員が集う場面を作ることだけではない「響き合い」もある。

個々の表現活動を大切に、それが学習の中心となる図工科において、私は個と個の自然なつながりを大切に、その中で子ども同士が気づきを伝え合ったり、他の友達の活動からヒントをもらって活かしたり、グループをつくったりと徐々にひろがることを「響き合う」姿ととらえる。そして、個の気づきや思い、表

現、活動が発信元となり、まわりの仲間の中に直接的、間接的に伝わり、広がり、深まる現象が学習の途中で、または学習の終わりに感じられたとき、それは‘響き合い’が成立したといえると考えている。その流れは、子ども同士の中の自然なものであるべきであり、それをみとることが指導者にとって大切なことなのだが、そのみとりの中で、子どもたち同士の作用が弱い、または、そこにもうひとおし必要であると判断される状況では、指導者が個と個をつないだり、意図的に場面を設定したりして‘響き合い’が生まれるような支援をすることも大切であると思っている。

以下に、本題材の中で表れた“互いのまなざしが響き合う”子どもの例をあげる。

写真4のA児は個々の活動に入ると、自分なりのイメージがすでに浮かんでいたのか、すぐにまわりにある落ち葉に目を向け、集め始めた。その集め方には思いが表れており、同じような大きさではあるが赤や黄色、茶色など色味が違い、発色のきれいなものを選んで集めているようであった。そして、集めた葉をていねいに並べてその端を接着していき、最後に小さな籠のように形を整えた。そのような、すばやく発想し熱心に取り組んでいるA児の表現をみた何人かの子どもたちの表現に、その後変化が見られた。

写真5のB児は、はじめは自分の確かなイメージを持ってまわりを歩き回ったり、友達の表現をみたりして過ごしていたが、そんな時間の中でA児の表現に触れ、その後、写真のように茶色い葉を筒状に接着して自分の集めた材料に組み合わせて表現していた。写真6のC児も、自分の表したいものがなかなかイメージしにくい中で枝や木切れの材料を集めるものの、そこからつくりだすアイデアが持てずにいたが、B児の表現からヒントを得て「それいいなあ」とB児に伝え、落ち葉をつなげることを自分の表現の中に取り入れた。また、写真7のD児は、自分のイメージで表現してつくり始めていたものがすでにある中で、A児の表現のよさに気づき、「Aくん、ぼくもちよっとまねしていい?」「いいよー。」のやりとりの後、色のついた落ち葉を選んで拾い集め、自分の表現に付け足した。

A児の表現は、友達との直接的なかわりを持ってよさが認められた満足感をその場で本人に与えたり、間接的なかわりでよさが伝わっていったことを後で知ることにより成就感を得たりして、A児本人にとっても、自分の表現に自信を持ったりよさをあたためたりすることにもつながっていたといえる。

このように、ひとりの表現から発信し、その思いやよさがまわりの仲間を受信され、その材料や行為性などが個々の表現や活動に活かされ、ひろげられ、その作用が相互にはたらき合う姿が“互いのまなざしが響き合い”であると考えられる。

## 5. 成果と課題

本題材において、子どもたちはそれぞれにまわりにある材料の形や色を活かしながら、自分の表したい巣をつくり出すために必要な方法をみつけながら活動していた。これは、つくり出す表現とともに造形行為そのものも楽しんだとも言えるだろう。また、程よい広さの自然環境の中で、他の友達の活動が視野に入り、互いの活動のよさを知ったり交流したりすることができ、友達とのかかわりあい自然に生まれ、ともに題材に取り組む楽しさやお互いの思いを伝え合う姿も生まれた。そこから、机の上でもできるような小さな手先だけの活動ではなく、体全体の感覚を十分に働かせたダイナミックな活動となり、造形的な資質や能力を生かし、自分の思いを形や色で表すことにつながっていった。

“感じる”ことを大切にし、“感じた”ものを“表そう”とし、また、“表した”ものから“感じ”，そこから思いうかんだものをつけたしたり、つくりかえたりしてまた“表し”…という学びの連鎖が子どもの学びの姿に表れるような実践を今後も行っていきたい。子どもが本題材の学習において経験したことが、自分の表現方法のひとつとして今後の表現活動にも活かされることを願っている。

